

田中俊太郎
博士後期課程学位審査演奏会

2018年2月17日14時開演

東京藝術大学音楽学部 第6ホール

伴奏 鈴木真理子
ピアノ 鈴木優輔

プログラム

信時潔《小倉百人一首より》

1. 〈月見れば〉 大江千里
2. 〈久方の〉 紀友則
3. 〈花の色は〉 小野小町
4. 〈淡路島〉 源兼昌
5. 〈長からん〉 待賢門院堀川
6. 〈逢ふことの〉 中納言朝忠
7. 〈人はいさ〉 紀貫之
8. 〈ほととぎす〉 後徳大寺左大臣

フェリックス・ワインガルトナー《日本の歌》Op.45 パウル・エンダーリンク独訳

1. 〈聖なる湖で〉 大津皇子
2. 〈雪の鐘〉 光孝天皇
3. 〈月の光〉 柿本人麻呂
4. 〈家路〉 凡河内躬恒
5. 〈夏風〉 凡河内躬恒
6. 〈雪の足跡〉 静御前
7. 〈乙女の踊り〉 僧正遍照
8. 〈もう一度来ておくれ〉 和泉式部
9. 〈日本〉 舒明天皇

山田耕筰《二つの古代日本の伝説的譚詩》より 〈道成寺の鐘〉

フレデリック・マーテンス詞

松平頼則

〈静けき夕〉 深尾須磨子詩

《南部民謡集第一集》より

〈牛追唄第一〉

《南部民謡集第二集》より

〈山唄〉

〈甚句踊唄〉

アレクサンドル・タンスマン 《8つの日本の歌》より

〈白露に〉 詩 文屋朝康

橋本國彦 《タンスマニズム》

松平頼則 《古今集》 ジョルジュ・ボノー仏訳

1. 〈谷風に〉 源当純
2. 〈君ならで〉 紀貫之
3. 〈さみだれに〉 紀貫之
4. 〈きりぎりす〉 藤原忠房
5. 〈雪降りて〉 凡河内躬恒
6. 〈秋風に〉 壬生忠峯
7. 〈はつかりの〉 凡河内躬恒
8. 〈川の瀬に〉 紀友則

ごあいさつ

これまで、修士課程においては江文也《生蕃四歌曲集》、箕作秋吉《芭蕉紀行集》などを取り上げ、博士課程においては清瀬保二《信濃民謡集》、松平頼則《南部民謡集》、平尾貴四男《隅田川》などに対象を広げて演奏及び研究を行ってきました。江の作品は、民族的な素材に対してバルトークの影響をうかがわせる創作がなされ、激しいリズムや半音階的でモダニスティクな感覚が特徴的で、箕作の作品は、独自の五度圏和声論によって短期中にドラマティックな表現が現なされています。この中でも、松平作品は不協和音や半音階的な進行など、同時代の作品とはどこか異色で近代的な音が用いられ、一見しただけではどのような要素を持った音楽なのかを把握することができませんでした。

そうした疑問から博士論文では、「松平頼則《古今集》研究——近代フランス音楽受容から戦後創作への過程として」と題し、松平の創作史研究と、《古今集》(1939-1945)の作品研究を行いました。近代フランス音楽をいち早く受容しその紹介者として活動した松平は、《古今集》創作において、ポーランド人作曲家アレクサンドル・タンスマンからの影響のもと、雅楽の様々な音楽要素を作品に取り入れることを試みました。松平はここで、タンスマンからの影響によって第一次大戦後のモダニズム音楽の潮流としての新古典主義を超克し、また、後にセリー技法や偶然性の音楽など現代音楽創作のインスピレーションとなる雅楽と出会いました。

今回の演奏会では、松平作品以外にも、信時潔、山田耕筰の欧米滞在中に作曲した作品、ワインガルトナーの独語翻訳和歌歌曲、松平に影響を与えたタンスマンの作品のほか、橋本國彦がタンスマンをオマージュして作曲したピアノ曲《タンスマニズム》をとりあげます。

本研究において、指導教諭としてご指導にあってくださいました福島明也先生、永井和子先生、塚原康子先生、杉本和寛先生、長い時間をかけて共に音楽作りをして下さいました鈴木真理子先生、ゲストとして演奏をして下さいます鈴木優輔様、本研究のため《古今集》の原作仏語訳詩楽譜をご紹介くださいました奈良ゆみ様、歌詞の精査をご協力くださいましたモニック・プーヴェ様にはこの場をかりて厚く御礼申し上げます。

2018年2月17日

田中俊太郎

目次

信時潔《小倉百人一首より》	2
フェリックス・ワインガルトナー《日本の歌》Op. 45	4
山田耕筰《二つの古代日本の伝説的譚詩》より〈道成寺の鐘〉	10
松平頼則.....	12
《静けき夕》(1928)	12
《南部民謡集第一集》(1928-37) 《南部民謡集第二集》(1938)	13
アレクサンドル・タンスマン《8つの日本の歌》より〈白露に〉	15
橋本國彦《タンスマニズム》	15
松平頼則《古今集》(1939~1945)	16

信時潔《小倉百人一首より》

信時潔は、1887年大阪で大阪北協会の牧師であった父吉岡弘毅^{よしおかこうき}と母とりの三男として生まれた。父弘毅は、陽明学を学び、尊王攘夷派として戊辰戦争に従軍した後、外務権少丞として外務省における日朝外交最初の担当者として国交樹立を試みたが、1874年には征韓不可の建白書を左院に提出するに至った。1875年にプロテスタント一派である長老派で洗礼を受けると、本郷日本基督一致教会の創立に参加して長老に選出されたほか、東京基督教青年協会（東京 YMCA）の創設にも関わった後、高知教会、京都室町教会の設立に関わり、大阪北教会の牧師となった。信時は、幼少期は父の教会での活動とともに、大阪、高知、京都、大阪と転々とし、1905年東京音楽学校予科に入学、翌1906年には本科器楽部でチェロを専攻し、アウグスト・ユンケルに指揮法、ハインリヒ・ヴェルクマイスターにチェロ、ルドルフ・ロイテルに対位法及び和声を学んだ。1910年に研究科器楽部に進み1912年に修了すると、研究科作曲部に学んだ。1920年からベルリンに留学し、ゲオルグ・シューマンに作曲をヴィリー・デッケルトにチェロを学び、1922年に帰国した。帰国すると『全訳コールユーブンゲン』『楽式論』などの出版に携わり、1929年には東京音楽学校唱歌編纂掛編纂員となった。1932年の東京音楽学校本科作曲部創設に尽力すると、新設と同時に教授を辞し講師となった。この後の門下生には柏木俊夫、高田三郎、大中恩らがいる。1937年日本放送協会の委嘱によって《海ゆかば》作曲、1940年紀元二千六百年奉祝芸能祭の演奏会において交声曲《海道東征》が初演された。戦後は生成会の同人となり、雑誌『心』に寄稿するほか、1950年には『信時潔独唱曲集』『信時潔合唱曲集』を出版、1954年に東京藝術大学講師を退任した。1963年文化功労者、1964年勲三等旭日中綬章。1965年、心筋梗塞のため死去した。

《小倉百人一首より》(1920～1922)

《小倉百人一首より》はその名の通り、藤原定家が京都小倉山の山荘で編んだとされる小倉百人一首の中から8首をとり、信時がベルリン留学中の1920年から22年の間に作曲された。信時は八首八様の音のパレットを駆使して作曲しており、彼の代表的な歌曲集《沙羅》同様、詩の内容に一貫性はないが、音楽としての一貫性や統一感を感じることができる。

また、第三曲〈花の色は〉では後に箕作秋吉が〈なめいし〉などで体現するようなシンプルな五度和音のオスティナートが使われ、第六曲〈逢ふことの〉では五音音階による対位法が歌唱旋律と絡み合い、第八曲〈ほととぎす〉では機能和声外の音によるホトトギスの鳴き声の表現がなされるなど、様々な技法が用いられる。33歳で海を渡った信時が異国ベルリンの地で刺激的な音楽体験をしていたことが想像される。

歌詞

1. 月見れば ちぢにもものこそ 悲しけれ
わが身一つの 秋にはあらねど

おおえのちさと
大江千里

2. ひさかたの 光のどけき 春の日に
静心なく 花の散るらむ

紀貫之

3. 花の色は うつりにけりな いたづらに
わが身世にふる ながめせしまに

小野小町

4. 淡路島 かよふ千鳥の 鳴く声に
いく世寝覚めぬ 須磨の関守

みなもとのかねまさ
源 兼昌

5. 長からむ 心も知らず 黒髪の
乱れて今朝は ものをこそ思へ

たいけんもんいんのほりかわ
待賢門院堀河

6. 逢ふことの 絶えてしなくば なかなか
人をも身をも 恨みざらまし

中納言朝忠

7. 人はいさ 心も知らず ふるさとは
花ぞ昔の 香ににほいける

紀貫之

8. ほととぎす 鳴きつる方を 眺むれば
ただ有明の 月ぞ残れる

後徳大寺左大臣

フェリックス・ワインガルトナー 《日本の歌》 Op. 45

フェリックス・ワインガルトナー (Edler Felix Paul Weingartner, 1863~1942) は、現在はクロアチアとなっているオーストリア=ハンガリー帝国のザーラに生まれたユダヤ人指揮者、作曲家である。ワインガルトナー家は、オーストリア貴族の家柄であったが、4歳の時に父が亡くなると貧しくなった。オーストリアのグラーツに移ると間もなく作曲を学び始める。17歳で音楽評論家ハンスリックの推薦によりライプツィヒ大学で哲学を専攻した。18歳になるとライプツィヒ音楽院に入学し、三年後にはフランツ・リストの門弟となった。20歳でケーニヒスブルクの歌劇場で指揮者デビューし、自作のオペラの初演も行った。続いて、ダンツィヒ、ハンブルクの歌劇場の指揮者となると、1891年にはベルリン宮廷歌劇場(現ベルリン国立歌劇場)の首席指揮者を務めた。この頃のベルリンでは同時代人としてハンス・フォン・ビューローやR・シュトラウス、G・マーラーらが指揮者として演奏していた。1908年にはマーラーの後任としてウィーン宮廷歌劇場(現ウィーン国立歌劇場)及びウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の音楽監督に就任した。1937年に日本に來日し、新交響楽団(現NHK交響楽団)を率いて国内を演奏旅行したほか、「ワインガルトナー賞」作曲コンクールを開催した。優等賞5名、一等賞5名、二等賞9名が選ばれ、松平頼則は管弦楽《五つの南部民謡》により一等賞を獲得している。作曲家としては、7つの交響曲、4つの交響詩をはじめとする21の交響的作品、12の室内楽作品、6つのピアノ曲、9つのオペラ、4つの合唱作品、36の歌曲作品、3つの劇付随音楽を残している。オペラ《寺子屋(Die Dorfschule)》(1930)は、上田萬年と和歌の翻訳論争を繰り広げたカール・フローレンツによる訳を素材としており、歌舞伎及び浄瑠璃の演目『菅原伝授手習鑑』を元としている。

《日本の歌》 Op. 45 (1908)

パウル・エンダーリンクによってライプツィヒで出版された『日本の文学と詩(Japanische Novellen und Gedichte)』(1906)のテキストに1908年に作曲された。ワインガルトナーとこの詩集との出会いには、ヴァーグナーやスメタナなどの後援者でありウィーンとパリの社交界の花形であった、パウリーネ・フォン・メッテルニヒの存在が大きく影響している。彼女は1901年にはウィーンのプラター広場で桜まつりを開催し、日本に興味をもった五万人以上の人々を集めた。ワインガルトナーは伝記の中で1908年当時の様子として、「私は、当時のウィーンではとても狭い人間関係を築いていた。私に対する敵対的な雰囲気は、疑い深く、また萎縮させていたからだ。例外はパウリーネ・メッテルニヒ女史であった。この、知的な女性は私にとっても暖かく接してくれ、私ははじめから彼女に魅了されてしまった。」と語っている。

当時、日本の俳諧はヨーロッパへと伝わり、ヨーロッパ近代詩に深く影響を与えていた。日本の文化が単なるジャポニスムではなく、彼らの創作を刺激していたということになるが、ワインガルトナーのこの作品もそうした文脈に位置づけられる。彼はマーラーの後任としてウィーン・フィルを率いたが、《日本の歌》における音楽からもマーラーの時代の同時代人としての性格を感じ取ることができる。

興味深いのは、ワインガルトナーの想像力は明らかにヨーロッパのそれであるということである。最も象徴的なのは僧正遍照の「天つ風 雲のかよひ路 吹きとじよ 乙女の姿 しばしとどめむ」の歌に着けられた音楽だが、乙女が舞っている音楽は明らかにワルツである。ドイツ語に訳された翻訳和歌は、ワインガルトナーの想像力を自文化の範疇で飛躍させているように思われる。それでも、マーラーのように肥大化した後期ロマン派の音楽を、ミニアチュールの形に 180 度方向転換させた翻訳和歌の功績は大きいのではないか。

歌詞

1. Am heiligen See 聖なる池で

大津皇子

被死らしめゆる時、磐余の池の陂にして涕を流して作りましし御歌一首
ももつたふ 磐余の池に 鳴く鴨を 今のみ見てや 雲隠りなむ
(万葉集 卷第三 四一六)

Am heiligen See

Blüten schneien....
ein Nebelschleier verhüllt den See.
Die Wildgänse schreien
am heiligen Weiher von Iware.
Dunkler Träume Schar
tanzt ihren Reihen;
mein Herz ist schwer:
wenn übers Jahr
die Wildgänse schreien,
hör' ich's nicht mehr.

聖なる湖で

花が香る
霧が湖を覆う
雁は磐余の
聖なる池に鳴く
暗い夢想は
雁の群れに踊る
私の心は重い
一年のうちに
雁の声を
聞く事もなくなる

2. Schneeglöckchen 雪の鐘

光孝天皇

君がため 春の野にいでて わかなつむ 我が衣手に 雪はふりつつ
(古今和歌集 卷第一 春歌上 歌二十一)

Schneeglöckchen

Ich habe für dich, du Liebste,
mich hundertmal gebückt
und lächelnd der Wakana
schimmernde Blüte gepflückt.
Und ist doch noch kein Frühling!
Kein Grün sonst weit und breit:
der Wind zog über die Felder,
und Schnee fiel auf mein Kleid.

雪の鐘

愛する人よ、私は
何度も身をかがめ
若菜に微笑みかけ
輝く花を摘み取る。
そこにまだ春は来ていない！
広い広野には緑もない
風は野を吹き過ぎ
雪は私の衣に落ちる

3. Mondlicht 月光

柿本人麻呂
雑歌

天の海に 雲の波たち 月の舟 星の林に 漕ぎ隠る見ゆ
(万葉集 卷第七 一〇六八)

Mondlicht

Das Mondschiif segelt am Himmelsmeer
und streift den Wolkenstrand.
Über das nächtige Nipponland
gleitet sein Leuchten her.
In meinem Glase flimmert sein Schein,
der im Kräuseln des Sees sich bricht.
Majestätisch zieht sein Licht
in die Sternenflut hinein.

月光

月の帆船が天の海を帆走し
雲の浜につく
日本の夜の上を
輝きながら滑る
私の玉は、波立つ湖に輝く
その光が映り輝き
崇高なその光は
満潮の星の光の中に向かっていく

4. Nach Hause 家路

凡河内躬恒

さくらの花の咲きけるを見にまうで來ける人によみ送り
我が宿の 花見がてらに くる人は 散りなむのちぞ 恋しかるべき
(古今和歌集 卷第一 春歌上 六七)

Nach Hause

Zäumet die Rosse und steigt auf:
Zu der Heimat führt uns der Lauf!
Zu der Heimat, wo laue und sachte
Winde wehn, wo der Frühling erwachte!

家へ

馬に轡をつけ、出発する
馬は私を乗せ故郷へと足を進める
暖かく穏やかな故郷へ
風が吹き、春が目覚める場所へ！

5. Sommerduft 夏の香

凡河内躬恒

月夜に、梅の花を折りてと人の言ひければ、折るとてよめる
月夜には それとも見えず 梅の花 香をたずねてぞ 知るべかりける
(古今和歌集 卷第一 春歌上 四〇)

Sommerduft

Die Nacht ist dunkel.
Trüb und trüber flimmern die Sterne,
die so hell einst glühten.
Ein süßer Duft lebt nur und weht herüber:
der Duft von Pflaumenblüten.

夏の風

夜は暗く
さっきまで輝いていた星の光は
だんだんと曇っていく
今は甘い風がこちらへと漂ってくる
梅のつぼみから漂ってくる風が

6. Spuren im Schnee 雪の足跡

静御前

吉野山 峰の白雪 ふみわけて 入にし人の 跡ぞ恋しき
(吾妻鏡)

Spuren im Schnee

Am Berg von Myosino, in kahler Höh',
entdeckt' ich seine Spuren im Flimmerschnee.
Beim Sternlicht überschritt er den Felsengrat.
Und in Gedanken ging ich mit ihm den Pfad.

雪の足跡

美吉野の山の岩の頂の上
私は輝く雪の上に足跡を見つける
それは、星の光の近くで岩尾根を越える
私は物思いにふけりつつその細道をたどる

7. Mädchentanz 乙女の踊り

僧正遍照

天つ風 雲のかよひ路 吹きとじよ 乙女の姿 しばしとどめむ
(古今和歌集 雑上 八七二)

Mädchentanz

Die Jungfrauen tanzen....
O Himmel, hab' Gnade:
versperre mit Türen
und Wolken die Pfade,
die zu dir führen!

Dann stirbt ihr Begehren,
aus irdischer Klause
nach Hause, nach Hause:
zum Himmel zu kehren.
Die Jungfrauen tanzen...

乙女の踊り

乙女は踊る
おお、天よどうか
扉を閉ざし
あなたへとつながる
道を曇らせて下さい

すると彼女たちの気持ちも萎えるでしょう
現世の小道を通して
家へ家へと
天に戻ろうとする気持ちも
乙女は踊る...

8. Komm einmal noch もう一度来ておくれ

和泉式部

あらざらむ この世のほかの 思ひ出に いまひとたびの 逢ふこともがな
(後拾遺和歌集 卷第三 恋 七三)

Komm einmal noch

Komm einmal noch, Geliebter!
Am Lager steht der Tod.
Der läßt zu Schnee erbleichen
meiner Wangen Rot.

Komm einmal noch, Geliebter!
So stirb sich's gut und mild:
ein Liebeswort auf den Lippen,
im Sinne dein liebes Bild

もう一度来ておくれ

もう一度来ておくれ、愛しいあなた！
死を待つこの場所に
私の赤い頬は
雪で青ざめてしまいました

もう一度来ておくれ、愛しいあなた！
あなたの唇からの愛の言葉
あなたの愛しい姿を思いながら
死ぬことは望ましく甘美です

9. Japan 日本

舒明天皇

天皇の香具山に登りて望国したまひし時の御製歌

大和には 群山あれど 取り装ろふ 天の香具山 騰り立ち 国見をすれば 国原は
煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし国ぞ 蜻蛉島 大和の国は

(万葉集 巻第一 二)

Japan

Das Land Yamato hat Berge,
und Berge in seinen Reichen.
Aber der schimmernde Kaguyama
hat nicht seinesgleichen.
Auf seinem Gipfel stand ich
und blickte nieder ins Land:
Aus grüner Ebne stieg langsam
zum Himmel Rauch und entwand.
Über die Meerfluth der schlohweiße Flügel
der Möwe strich...
O Land Yamato, Libelleneiland,
wie lieb' ich dich!

日本

大和にはその国中に
山々がある
しかし、輝く香具山は
同じものではない
私はその頂上に立ち
国を見渡す
緑の平野からは
ゆっくりと煙がたち、消えてゆく
海原には真っ白な鳥
カモメが舞う...
おお、大和の地よ、愛すべき土地よ
何と私はお前を愛しく思うことか！

山田耕筰 《二つの古代日本の伝説的譚詩》より 〈道成寺の鐘〉

‘The Bell of Dôjôji’ from “Two Legendry Poems of old Japan”

山田耕筰は1886年に東京に生まれ、義兄ガントレットから西洋音楽の手ほどきを受けた山田は、東京藝術大学の前身である東京音楽学校に進学し、予科を経て本科声楽部、研究科に学んだ。当時東京音楽学校には作曲科がなかったが、山田は在学中に習作を作曲し、自作品を携えて学友と弦楽四重奏の演奏をしていた。卒業後、山田は三菱財閥の岩崎小弥太と知り合い、彼の支援により1910～13年にベルリンへ留学し作曲を学んだ。当時作曲した交響曲《かちどきと平和》は日本人が最初に作曲した交響曲である。帰国後は岩崎が主宰する東京フィルハーモニー会管弦楽部で指揮者として活動するほか、自作の室内楽作品の発表演奏会を開催した。再び山田が海外へ向かうのは1917年末、今度はヨーロッパではなくアメリカへ旅立った。彼は帰国する1919年までに2回、自作品の管弦楽演奏会を公演したほか、現地で楽譜出版も行った。1920年代に入り、北原白秋と雑誌『詩と音楽』（1922～23年）を共同主宰、同誌では《六騎》《かやの木山の》などの歌曲や論考を発表した。また1924年には近衛秀麿の協力を得て「日本交響楽協会」を設立した。日本国内での活動が続いた山田だが、1930年代に入ると再び海外での作曲・演奏活動を行う機会を得る。1931年パリに赴きオペラ・バレエ《あやめ》を作曲、また帰路ソヴィエトでは《ロシア人形の歌》の初演を含む自作品の演奏会に出演した。この演奏会が好評を博し、1933年には再びソヴィエトに招かれ作品発表を行った。また1939年には歌劇《黒船》を作曲した。徐々に戦時色の強くなっていった時代において、山田の作品の内容も山田自身の活動も時局と関係していったため、戦後は戦争責任を問われた。1956年には文化勲章を受け、音楽家としての功績を称えられた。1965年、東京にて79歳で息を引き取った。

《二つの古代日本の伝説的譚詩》より 〈道成寺の鐘〉 (1918)

山田耕筰は1917年から1919年までのアメリカ滞在中、カーネギーホールで2回の管弦楽演奏会を開いた。1918年10月14日の「第一回管弦楽演奏会」では《秋の宴》、交響詩《暗い扉》《曼荼羅の華》等、1919年の「第二回管弦楽演奏会」では交響曲《かちどきと平和》、舞踏詩《マリア・マグダレーナ》等を指揮した。

《二つの古代日本の伝説的譚詩》は、1918年の「第一回管弦楽演奏会」において、ワーグナーのオペラを得意としたバスバリトンのクラレンス・ホワイトヒルのために作曲された。〈The Bell of Dôjôji (道成寺の鐘)〉〈Song of the Dance of Yedo (江戸の踊り子の唄)〉の2曲からなり、歌詞は山田の依頼によって音楽評論家のフレデリック・マーテンス (Frederick Herman Martens : 1874-1932) が創作し、カーネギーホールでの演奏会では管弦楽伴奏で演奏された。

〈道成寺の鐘〉は、ワーグナー歌いのホワイトヒルにあてられたこともあり、オペラティックで力強い声の要求されるバラードで、歌詞は三人称で語られる。

歌詞

The Bell of Dôjôji

Frederick Martens

Anchin the Monk, beside the marshy pool,
Met Kiyohime, the lady merciless.
She smiled, and touched his rosary. At her caress
His vows were all unsaid, and she his heart did rule.

Vainly he prayed in shaded cloister hall,
To be delivered from her hateful spell;
With poppies crowned she entered in his moonlit cell.
He fled into the night, yet she pursued her thrall.

Vainly he won Dojoji's templed shrine,
Beneath its bell of bronze a refuge sought;
For Kiyohime the bell-rope cut. The monk was caught!
While o'er the bell she crept like some lithe, clinging vine.

Her green robe glitt'ring into golden scales,
She turned a fearsome dragon, breathing fire;
The bronze bell red-hot glowed, lashed by her tail in ire,
Ere died away poor Anchin's piteous cries and wails.

道成寺の鐘

フレデリック・マーテンス

僧安珍は沼のほとりで
残酷な女性、清姫に出会った。
彼女は微笑み、彼の数珠に触れた。彼女の愛撫に
安珍の僧侶としての誓いは滅び果て、彼女は彼の心を操った。

安珍は、彼女の憎むべき呪文を逃れるため
ほの暗い聖堂で祈ったが虚しく、
清姫はケシの花で飾り、月影がさす房に入った。
安珍は逃げたが、清姫はその奴隷を追った。

安珍は道成寺の社にたどり着き、
虚しくも青銅の鐘の下に逃げ場所を求めた。
だが清姫は鐘の綱を絶ち、僧侶は捕らわれてしまった！
すると彼女は葡萄の蔦のように鐘の上にまとわりついた。

彼女の緑の衣は、黄金の鱗となって輝き、
彼女は火を噴く恐ろしい龍にかわった。
青銅の鐘は赤々と燃え輝き、彼女の尾は怒りに打ちつけられた。
安珍が哀れにも叫び、泣き、死に至るまで。

松平頼則

松平頼則は、徳川の流れを汲む松平頼孝子爵の長男として、1907年（明治40年）5月5日、東京小石川久堅町に生れた。彼の名は、父頼孝の「頼」と、外祖父徳大寺実則公の「則」を取って頼則と命名された。祖父頼策は常陸府中最後の（10代目）藩主である。外祖父徳大寺実則は、東山天皇の血を引き、宮内卿、内大臣、明治天皇の侍従長を勤めた。頼則は、鳥類研究をしていた父のもと幼少期を過ごし、そこで雇われていた鳥類画家小林重三の仕事を見て芸術的な創造に興味を抱いた。1914年学習院初等科に入学、1920年にはフランス語教育が行われていた暁星中学部に転校した。1925年、アンリ・ジル＝マルシェックスがバッハから近現代に至るピアノ曲を演奏した来日公演に衝撃を受けて音楽家を志すと、小松耕輔、ラウルトップ、ベルクマイスターに師事をした。1926年に慶應義塾大学文学部予科に入学しフランス語を学ぶが、一時、東京高等音楽院（現・国立音楽大学）に籍を移し、また1930年の新興作曲家連盟の創設にも関わった。1931年慶應義塾大学を中退すると、この年から4年連続でジル＝マルシェックスのプログラムになったピアノ独奏会を開催し、ラモー、クーブラン、ラヴェル、フランク、サティ、ドビュッシー、プーランク、オネゲル、ダッカ、グーゼンス、セヴェラック、マリピエロ、タンスマンと自作の作品を演奏した。1933年のタンスマン来日時には、新興作曲家連盟が催した会において面会し、音楽上の示唆を得た。1935年にアレクサンドル・チェレプニンが来日すると、チェレプニン・エディションからピアノ曲《前奏曲ニ調》が出版され、またチェレプニン賞では《パストラル》が第二位入賞を果たした。1937年には《パストラル》がミネッティ指揮のサンフランシスコ交響楽団によりアメリカ初演された。また、来日したワインガルトナーが開催したワインガルトナー賞に管弦楽曲《五つの南部民謡》が入選した。また《フルートとピアノの為のソナチネ》はケルロイターにより欧州14都市で演奏及び放送された。戦後には、1951年に《盤渉調越天楽による主題と変奏》がヘルヴェルト・フォン・カラヤンの指揮で演奏されるなど、再び創作活動を活発にするとISCM（国際現代音楽協会）音楽祭で多数入選を続け、2001年に亡くなるまで現代音楽における最新の語法を取り入れながら創作を続けた。

《静けき夕》（1928）

1930年6月号の『音楽新潮』誌上に発表された。深尾須磨子の詩による。作曲は1928年12月17日で、ドビュッシーの影響の濃い時代の作品である。

松平はこの作品について、以下のように述べている。

僕は近代感覚の自由な飛躍や、ヨーロッパの旧和声理論を否定して日本人とし

ての新しい和声理論を採用するために、アトナリテ（無調・筆者注）で作曲する事が最も便利だろうと想着てゐる。（ヨーロッパのメロディと多くの相違点を持つ日本のメロディは、従って別な和声理論を持つべきだといふのが僕の数年前からの考へなのだ。）——松平頼則「静けき夕（その他）」、『音楽新潮』1930年6月号。

旋律は朗唱的であり、「ヨーロッパの旧和声理論」（＝機能和声）を超克しようとする若き作曲家の意欲作である。ピアノ伴奏部右手の平行和音は、松平が自著『近代和声学』で譜例としてあげているドビュッシー《ペレアスとメリザンド》を思わせる。

歌詞

静けき夕

深尾須磨子

静けき夕べなり

秋の夕べなり

ひざまづき

こうべ垂れて

祈らまほしき

夕べなり

《南部民謡集第一集》（1928-37） 《南部民謡集第二集》（1938）

松平は、武田忠一郎が採譜した南部民謡にピアノ伴奏部を附加する形で2つの《南部民謡集》を創作した。第一集から第二集を創作した1928年から1938年は、松平が作曲技法において、ドビュッシー受容からフランス六人組受容へと移っていく時期でもある。それだけにこの2つの《南部民謡集》では、近代フランス音楽の様々な技法への挑戦がみられる。

〈牛追唄第一〉について松平は、「『南部牛追唄』見せられたとき、思わず、私には伴奏の最初の音が浮かんた。それは sib→mi（増四度）である。（中略）それはドビュッシーの花粉にまみれていた私にとって自然な選択だった。」と語っている。ドビュッシー受容の特徴的な作品である。松平が、「プーランクやミヨーに恐る恐る手を出」したという〈甚句踊唄〉は、この曲集の中で複調の技法採用されており、歌唱旋律に対して、ピアノ伴奏部左手の持続音は調的に関係のない音が採用されている。この曲で、松平は六人組の技法として複調を用いている。

歌詞

牛追唄第一

田舎なれども南部の国は
西も東も金の山。

澤内三千石 お米の出どこ
つけて納めた御蔵米。

山唄

ヤエデヤエ、や十五七はヤエ
沢を登るにや、笛、笛吹けばヤエ
峯の小松は、みな、みな靡く
靡く小松に、月、月冴ゆるヤエ
冴ゆる月こそ、めで、目出度けれヤエ

甚句踊唄

甚句踊りコの始まる時は
へらも杓子もサーハ手につかぬ

おどり踊らばしなよく踊れ
しなのよいのをサーハ嫁にとる

アレクサンドル・タンスマン 《8つの日本の歌》より 〈白露に〉

アレクサンドル・タンスマン (Alexandre Tansman) は、1897年6月12日ポーランド、ウッチ生、1986年11月15日パリ没のユダヤ系作曲家、指揮者、ピアニストである。松平は、創作初期からタンスマンを師表とした、以下のような音楽観をもっていた。

ポーランドの感覚と現代のダイナミズムの握手はタンスマンの主義であり、僕の共鳴する主義である。然し、僕は日本人である故に、日本の感覚を讃美する故に、「日本の感覚と現代のダイナミズムの握手」を目的とする。——松平頼則「フランクマン」、『音楽新潮』1933年6月、51頁。

タンスマンは、ラヴェルの紹介によってパリで六人組と関わり、作曲スタイルは彼らと共通するが、六人組と行動を共にすることはなく、むしろ彼らを批判的に評価した。あまりに技巧的、尖鋭的になりすぎる同時代の作曲傾向に対して、タンスマンが主張したのは、音楽における主観性、抒情性の復活であった。

〈白露に〉

1933年のタンスマン来日時における演奏会では、第4曲目以外の作品を、日本語で荻野綾子歌唱、タンスマンピアノによって演奏された。ポーランド語による訳詩は五行詩として書かれており、タンスマンは全曲において詩行を「1・2・3・1・4・5・1・2」と繰り返して作曲されているが、この演奏では、和歌を2回繰り返す形で演奏された。

歌詞

白露に 風の吹きしく 秋の野は

つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける

文屋朝康

橋本國彦 《タンスマニズム》

二度来日し、新興作曲家連盟に迎えられたタンスマンは多くの日本人作曲家に影響を与えた。橋本國彦は1933年4月号の『月刊楽譜』（東京：松本楽器）にピアノ曲《Tansmanism》を発表した。右手と左手が異なる調性で奏でられ、タンスマンの音楽を複調の技法を通して捉えていることがわかる。

松平頼則《古今集》(1939~1945)

《南部民謡集》においてフランス六人組の音楽から影響を受けていた松平の意識は、タンスマンを通じて人間性の復活、音楽性の復活へと向かっていった。松平が自身の創作において、そうしたタンスマンの音楽観を最初に体現しようとしたのが《古今集》(1939~1945)であるといえる。

《古今集》は全8曲からなるが、松平は、タンスマン《8つの日本の歌》の音組織に習い、そこに雅楽の音使いを用いて、和歌と近代フランス音楽の合一を試みた。

さらに興味深いことに、松平はジョルジュ・ボノーによるフランス訳詩を用いて作曲した。ボノーは古典から安部公房まで多数の日本文学を仏訳した日本文学者である。

フランス語訳された和歌、尖鋭的な近代ヨーロッパ音楽の技法と雅楽の音楽要素と、日本と西洋が交錯するこの作品からは、戦後の創作を予感することができる。

歌詞

1. 《谷風に》

源当純

寛平の御時きさいの宮の歌合わせの歌

谷風に とくる氷の ひまごとに うち出づる浪や 春の初花

Fleurs de Glace

氷の花

Aux brises de la vallée

谷間のそよ風に

Voice que la glace s'est mise à fondre,

氷は解ける

Par endroits :

その場所に

Sant-elle pas, ces ondes jaillissantes,

湧き出ているのは

Les premières fleurs du printemps ?

春の初花なのでしょうか？

第2曲《君ならで》

紀貫之

梅の花を折りて人に贈りける

君ならで 誰にか見せむ 梅の花 色をも香をも 知る人ぞ知る

Envoi

贈り物

Si ce n'est à vious,

もしあなたでないなら

A qui l'envoyer,

誰に見せましょう

Cette fleur de prunier?

この梅の花を

Et ses nuances et son parfum

その色合いと香りは

Les peut sentir qui seul les sent!

感じる事の出来る人にしか感じられないのに

第3曲《さみだれに》

紀貫之

寛平の御時きさいの宮の歌合わせの歌

五月雨に 物思ひをれば 郭公 夜深く鳴きて いづち行くらむ

Coucou nocturne

郭公の夜

En cette saison des pluies,

雨の季節に

Je reste á penser mes pensées...

私は物思いにふけている

Un coucou

郭公は

Dans la nuit s'enfonce et crie :

夜に溶け込み鳴く

Coucou, dis-moi, où t'en vas-tu ?

郭公よ、教えておくれ、君はどこへいく？

第4曲《きりぎりす》

藤原忠房

人のもとにまかれりける夜、きりぎりすの鳴きけるを聞いてよめる

きりぎりす いたくな鳴きそ 秋の夜の 長き思ひは 我ぞまされる

A un ami trop faible

弱りきった友へ

Grillon,

きりぎりすよ

Cesse de te plaindre de la sorte :

どうかそんなふうには鳴かないでおくれ

A l'image de la nuit d'automne

秋の夜長の

S'il st des angoisses sans fin,

終わりのない苦悩は

Avant toi je les connais!

私の方がよく知っているのだから

第5曲《雪ふりて》

凡河内躬恒

雪の降れるを見て読よめる

雪降りて 人もかよわぬ 道なれや あとはかもなく 思ひ消ゆらむ

Chemin sans trace

足跡のない道

La neige tombe, et

雪が降る

Personne ne passe

その道を通る人は

Sur le Chemin:

いない

Sais-je pas ce Chemin sans traces:

足跡のない路を辿る

Mois qui m'enfonce en ma tristesse?

誰が私の悲しみを追いやってくれるのだろうか

第6曲《秋風に》

みぶねのただみね
壬生忠岑

題知らず

秋風に かきなす琴の 声にさへ はかなく人の 恋しかるらむ

Koto

箏

Dans le vent d'automne

秋風に

Le koto dant on jouie...

喜ぶ箏の音

Mais á cette soule voix...

しかし、その音に

Sans raison, pourquoi de la sorte

理由もなくなぜこのように

Brûler d'amor?

胸が熱くなるのだろうか

第7曲《はつかりの》

凡河内躬恒

題知らず

初雁の はつかに声を 聞きしより 中空にのみ 物を思ふかな

Désir

熱情

La première oie sauvage,

野生の鶺鴒

J'ai faiblement perçu son cri:

私はその鳴き声をかすかに聞く

Et depuis,

そうすると

Il n'est que le ciel vers quoi

空に

Puisse s'en aller mon désir!

私の熱情が向かっていく

第8曲《川の瀬に》

紀貫之

寛平の御時きさいの宮の歌合わせの歌

川の瀬に なびく玉藻の み隠れて 人に知られぬ 恋もするかな

Algues dans l'eau

流れの下の藻

Tout au fond de la rivière,

Les algues se sont ployant,

Et se cachant:

Ainsi, à son insu,

A part moi, je l'aime!

川底に一面

藻はたゆたい

そして隠れる

同じように密かに

恋焦がれる

Web サイト (<http://shuntarotanaka.com/>)

にて本日演奏作品の解説を行っています。

共演者プロフィール

鈴木真理子

東京藝術大学音楽学部附属音楽高校を経て、同大学ピアノ科を卒業。在学中よりソロ及び伴奏法の研鑽を積む。卒業後は声楽・合唱の初演を多く手がけ、共演ピアニストとして高い信頼を得ている。また新潟市民芸術文化会館“りゅーとぴあ”でのワンコインコンサートで、様々なテーマに基く魅力溢れる声楽コンサートを企画・演奏、好評を博すなど、その幅広い活躍は常に注目されている。声楽家 福島明也氏、多田羅迪夫氏との公演がCDリリースされている。奏楽堂日本歌曲コンクール優秀共演者賞複数回受賞。現在、東京藝術大学声楽科講師・コレペティトウアー、十文字学園女子大学講師。二期会バッハ・バロック研究会、瀬山詠子日本歌曲ゼミナールピアニスト。

鈴木優輔

1998 年生まれ。ショパン国際ピアノコンクール in ASIA アジア大会第 10 回銀賞、第 11 回金賞。第 8 回堺国際ピアノコンクール C 級第 3 位。第 33 回愛知ピアノコンクール高校 A 部門、B 部門両部門にて金賞併せて中日新聞社賞。2016 年ロシアン・ピアニースクール受講。

京都市立京都堀川音楽高等学校を経て、東京藝術大学音楽学部 1 年に在学。これまでに金山正美、長谷川千花、クラウディオ・ソアレス、崔理英の各氏に、現在、迫昭嘉、有吉亮治の各氏に師事。